



# 産経新聞

二代目の苦労というものがあ  
る。あまりに成功しすぎた父を  
持つ子は、どれほど資質と才能  
に恵まれていても生涯、父と比  
較されて割を食うことが多い。  
この点で、徳川家康と第2代

著したダニエロ・バルトリ  
は、家康と秀忠の人物像を比較  
しながら描いている。將軍(シ  
ヨウケン)秀忠は仏僧によって  
育てられたので、乳と同量ほど  
の毒を吸っていた。キリストを

## 歴史の交差点

武蔵野大特任教授 山内昌之



將軍秀忠の関係ほど歴史の教訓  
にあふれている例も珍しい。何  
よりも父に誠心誠意仕えた秀忠  
の2倍「たごす」に苦しむ手敵し  
は、人知れず二代目の苦悩を味  
わったに違いないからだ。

他方、亡くなった皇帝(イン  
ペラートル)の内府様(家康)

は「老齢で冷淡かつ理性の円熟  
のため性急でなくむしろのろ  
い、また温和な性格の父親」で  
あった。それでも、うわべだけ  
の熱心な信仰や権力への「わた  
み」から、キリスト教徒に残酷  
になった。とすれば、家康の

は「老齢で冷淡かつ理性の円熟  
のため性急でなくむしろのろ  
い、また温和な性格の父親」で  
あった。それでも、うわべだけ  
の熱心な信仰や権力への「わた  
み」から、キリスト教徒に残酷  
になった。とすれば、家康の

## 初代と二代目の関係

「善性」をまったく持ち合わせ  
ず、悪徳をすべて自分に集めた  
だけでなく倍加させた秀忠はい  
かなることをするか、と危惧す  
るのだ(『十六・七世紀イエス  
ス会日本報告集』IIの2)。秀  
忠の性格の一端がバチカンにも

を受け継いだことを「恭敬」す  
るために来日したと書いた。  
その真偽は別に実証されるべ  
きたが、秀忠は家康のように、  
朝鮮人を彼の保護下におき、も  
し他の国民がその安全を脅かす  
なら外国の侵略から朝鮮人を防  
護するように要望するために来  
日した、とコックスは秀忠に好  
意的なのだ(『イギリス商館長  
日記』原文編中、1617年9  
月20日条英文)。

5)年5月、新將軍が滞在中の  
伏見で能を見物していると、そ  
の小者と家康の手下らが喧嘩  
し、手負いや死者が多数出た。  
諍(いさ)いは江戸での喧嘩の意趣返し  
らしい(『当代記』慶長10年5  
月3日4日5日条)。

二元政治の運用を成功させる  
大事な要素は、隠居と当主との  
関係にもまして、家臣同士が互  
いの主人の威を借りず、角を突  
き合わせないことにある。家康  
と秀忠は大局的にうまくいった  
初代と二代目の関係といえるた  
ろう。現代の創業者と後継者、  
会長と社長との関係を考える上  
でも示唆に富む親子の話であ  
る。(やまうち まさゆき)